

## あ と が き

まず、大槌町における仮設住宅調査および災害公営住宅調査を継続していく中でお会いしたすべての皆様にお礼を申し上げます。調査でお話をお聞きした皆様、調査準備の段階で地域の情報やご助言を賜りました行政関係や自治会・町内会の皆様、そして調査で行動を共にした先生方や学生の皆様など、様々な方々との貴重な出会いから多くのことを学ばせていただき、今の自分があるように感じています。

私は、2012年に初めて仮設住宅調査に参加しました。2012年当時、早稲田大学の大学院生だった私は、2007年に発生した能登半島地震の被災地で、長期滞在しながら現地調査を行った経験はあったものの、東日本大震災後の大槌町のように壊滅的な被害を受けた直後の被災地に通った経験はなく、社会学者として何をして良いのか試行錯誤の連続でした。そうした時期に、仮設住宅調査への参加の機会がありました。2016年からは、地域の復興や生活再建の過程をさらに長期的に追っていけるよう、災害公営住宅調査を、岩手大学の麦倉先生、明治学院大学の浅川先生と共同企画してきました。2019年には、専修大学の非常勤講師として学生を引率し調査を企画・実施する立場になりました。調査対象地に関わる皆様に育てていただいたと言っても過言ではないと考えています。

ところで、これらの調査には2つの特徴があると私なりに考えています。1つ目は、お住いの方々に接し様々な声を偏りなく聴くことを大事にしている点です。そのために、質的調査（インタビューなど）と量的調査（調査票の回答結果を集計する調査など）の融合型調査を、全数調査の形で続けてきました。どちらかの調査方法だけでは、どうしても接点を持たない方が出てきます。すべての人にとって接点を持つ可能性をなくさないことを大事にしてきた調査と言えます。2つ目は、ある1時点の調査だけで終わるのではなく、長期に継続して声を聴くことを大事にしている点です。そのために、回答者の方々に名前を書いてもらう記名式の調査になっています。その結果、一部の方はこの9年間、どのように思いが変化してきたかが分かるようになっていきます。震災10年に向けて、被災した地域や皆様の「これまで」を振り返り、「これから」を考えるにあたり、こうしたタイプの調査は重要になるのではと私は考えています。よろしければ、大槌町の皆様、そして先生方や学生の皆様には、今後とも調査にお力添えをいただけましたら大変有難く存じます。

末筆になりましたが、東日本大震災から9年を迎えた大槌町の皆様および大槌町から移らざるを得なかった皆様、そして打ち続く災害で大変な思いをされている方々の生活と心が、少しでも平穏になりますことを心よりお祈り申し上げます。

2020年3月25日

早稲田大学文学学術院非常勤講師

専修大学人間科学部兼任講師

野坂 真